The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	各種肝疾患のリンパ球subpopulation
Author(s)	西内, 明子
Citation	大阪大学, 1979, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/32418
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【34】

氏名・(本籍)	西内明子（にしうち めいこ）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 4761 号
学位授与の日付	昭和54年11月30日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**各種肝疾患のリンパ球subpopulation**
論文審査委員	(主査) 教授 垂井清一郎 (副査) 教授 阿部 裕 教授 北村 旦

論文内容の要旨

〔目 的〕

肝疾患患者の病態の解明に関して免疫学的な要因が重視され，特にリンパ球すなわち，細胞性免疫に関係するT細胞と体液性免疫に関係するB細胞の関与が注目されており，その指標の一つとして末梢血におけるT細胞，B細胞populationがとりあげられ，各種の肝疾患時には末梢血リンパ球subpopulationが変動することが知られている。しかし肝組織像との関係を詳細に検討した報告は少ない。私は肝組織像と末梢血リンパ球分布との関係を詳細に検討し，リンパ球分布の検索が組織像からみた肝の病態を把握する一つの指標となりうるのではないかと考えた。同時に肝病変の反応の場である肝組織内のT細胞，B細胞を直接算定し，各種肝疾患と肝組織浸潤リンパ球分布との関係についても検討した。

〔方法ならびに成績〕

1） 末梢血リンパ球subpopulationと肝組織像

対象は昭和48年10月より52年4月までに大阪大学第2内科に入院又は外来通院し，腹腔鏡肝生検により診断を確定した急性ウイルス肝炎37例，慢性肝炎44例，慢性アルコール性肝炎8例，肝硬変症29例，その他の肝疾患計158症例の末梢血リンパ球subpopulationを算定した。T細胞は羊赤血球3個以上のロゼット形成細胞を数え，B細胞は10倍稀釈したFITC標識抗ヒト免疫グロブリン家兎血清を用いmembrane fluorescenceを有するリンパ球を算定し，ともに%で示した。これら以外の細胞をnull cellとした。成績は急性ウイルス肝炎の発症後2週間以内ではT細胞比率は低下し，それ以後では正常値を示す。慢性肝炎のT細胞比率は非活動型では対照群との間に差はなく，活動

型において有意に低値を示した。肝硬変症，慢性アルコール性肝炎共にT細胞比率は低値を示した。一方B細胞比率では肝硬変症においてやや高値であるが，その他の疾患と対照群の間に差はみられない。null cell比率は，T細胞比率が低値の慢性肝炎活動型，慢性アルコール性肝炎で有意に高値を示した。肝組織像との関係では，門脈域のリンパ球浸潤および形質細胞浸潤の程度よりも限界板破壊，肝小葉内細胞浸潤，巣状壊死の程度の強い症例がT細胞比率が低値を示す。B細胞比率と肝組織像の間には関連はみられない。これらの成績から末梢血T細胞比率の減少する場合は，(1)急性ウイルス肝炎の急性期および(2)慢性肝病変のうち肝臓の形態学的検討で，a)慢性肝炎の活動型を示す限界板破壊，肝小葉内細胞浸潤，巣状壊死の強度の例，b)慢性肝炎の肝細胞壊死後におこるP－C結合がありP－P結合の多い例，c)肝硬変症のうち大結節性肝硬変症，である。

2）肝組織内浸潤リンパ球subpopulation

対象は昭和51年6月より52年4月までの症例で，急性ウイルス肝炎10例，慢性肝炎18例，慢性アルコール性肝炎4例，肝硬変症9例，その他の肝疾患計48症例である。方法は肝生検切片7mm長を生理食塩水で乱刺灌流し，細切し，遊離した円形細胞を採取し，末梢血と同様の方法でリンパ球比率を算定した。採取した円形細胞のラテックス粒子の貪食率は疾患に関係なく5～8％で，ほぼ一定であった。成績は，急性ウイルス肝炎では肝組織内T細胞比率は他の疾患に比し高値を示し，組織内B細胞null cellは低値を示した。このことは，ウイルス感染時の病巣におけるT細胞の一般的な反応性増加に一致し，その場合にはウイルス感染細胞に対するT細胞の反応が組織障害をおこすとされている。この事実は急性ウイルス肝炎における肝組織内T細胞の役割を示唆している。慢性肝炎では肝組織内T細胞比率は急性ウイルス肝炎に比し低値で，B細胞null cellは共に高値を示す。末梢血においては活動型が非活動型に比し低値を示すにもかかわらず，肝組織内T細胞比率は，活動型と非活動型との間に差はみられない。この点から慢性肝炎の肝病変では急性肝炎類似のT細胞の病変形成に対する関与以外に，T細胞の質的相異も考えねばならない。又B細胞，null cellの意義も軽視することは出来ない。HBs抗原の有無の間には肝組織内リンパ球分布の差はみられない。慢性アルコール性肝炎，肝硬変症の肝組織内リンパ球subpopulationは慢性肝炎とほぼ同様の成績を得た。

〔総　括〕

1）末梢血リンパ球分布と肝組織像との関係では，肝小葉内細胞浸潤，巣状壊死の強いものが末梢血T細胞比率が低値を示す。

2）肝組織内リンパ球分布では急性ウイルス肝炎でT細胞比率が高値であり，慢性肝炎では，T細胞比率が低値でかつ活動性の違いにもかかわらずT細胞，B細胞，null cell比率はほぼ一定である。慢性アルコール性肝炎，肝硬変症でも慢性肝炎とほぼ同様の値を示す。

論文の審査結果の要旨

本論文は，肝疾患の組織像と末梢血リンパ球比率との関係，更に肝病変の反応の場である肝組織内浸潤リンパ球比率との関係を検索したものである。その結果，末梢血リンパ球比率と活動性をあらわす肝組織像との関係を明らかにしえた。肝組織内リンパ球比率では，急性ウイルス肝炎でT細胞比率が高値であり，慢性肝炎ではT細胞比率が低値でかつ活動性の違いにもかかわらず両者に差がみられないことを知った。以上の成績は肝疾患の病態解明の重要な手掛りを与えるものである。